



# ねこみ

編集通信

平成四年  
(1992)  
七月十五日発行  
(年四回発行)

発行人 東 明雅  
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東 明雅 方  
Tel. 0471-75-1192

## 子規・虚子の過失

東 明雅

正岡子規は明治二十六年(一八九三)、「芭蕉雑談」の中で連句非文学論を展開し、従来の発句を俳句という新しい文芸として独立させた。このため、俳句は以後、空前の発展を遂げることになるが、連句、またそれに関する貴重な文化遺産は表亡の一途をたどることになる。

尤も、明治三十二年十二月号の「ホトトギス」には「自分は連句という者、余り好まねば、古俳書を見ても連句を読み事無く、又自ら作りし例も甚だ稀である。然るに此等の集(註「猿蓑」・「続明鳥」・「五車反故」を指す)にある連句を読めば、いたく興に入り感に堪ふるので、終には、これ程面白い者ならば自分も連句をやってみたいといふ念が起つて来る」と言っている。子規が「続明鳥」「五車反故」ともかく、「猿蓑」さえも読まないで、連句を非文学と断定したのであるから、その勇氣たるや驚くべきものである。尤もこの位の蛮勇がなければ、新しい俳句という文芸は生むことができなかったであろう。

彼の「連句非文学論」はその後、神託のように無条件に信奉され、連句という非文学として敬遠する風潮は、つい最近、昭和四十五、六年あたりまで残った。

彼とても、こんなに影響が残るとは想像しなかったろうが、事實は右の通りである。高浜虚子は師の子規と異なり、初めから連句に興味を示している。明治三十二年五月の「ホトトギス」には、「聯句の趣味」という一文を発表した。小説が縦に因果関係の糸をたどるのに対して、連句は横に各種の現象の切口をさぐり、連想という横の「変化の塩梅をかきさねることにより、一巻の

統一があると考えた。

さらに明治三十七年以後、同じ「ホトトギス」に次々に論文を発表し、その中で彼は「俳体詩」というものを提唱した。これは連句の中から、意味的連繋をもつフレーズを抜き出し、それにヒントを得て創り出されたもので、連句の中で転じのない部分のみを取り上げるという方法である。

その後、彼は昭和十三年四月「俳諧」という雑誌を、長男の高浜年尾に出させ、昭和十九年まで刊行させているが、この雑誌に見られる虚子の連句に対する考えも全く変化していない。

もともと、芭蕉によって完成された連句(俳諧)は付けと転じがキーポイントである。「歌仙は三十六歩、一步も後に帰る心なし」(三冊子)と言う通り、転じがない連句はただの連想ゲームにすぎない。俳体詩と言っても、明治の newer 詩の一変体で、転じのない連句は眞の連句ではない。

芦丈先生は「子規は連句の食わず嫌いを数多く作った。それに対し虚子は間違った連句を広めた。どちらが罪が重いかと言えば虚子の方である」と言われたのは尤もである。

## 車座縁起

今宮 水壺

立川駅南口の居酒屋「石川屋善兵衛」が店をたたむという。店の名も風変わりだがママも並ではない。少々名残惜しい気持ちもあった。「いよいよおしまいだね。」  
「そうね。」「さびしくなるね。」「まあね。」「たまには会いたいね。」というようなやりとりのあと、ひよいと思いついて「連句って知ってる？」と聞いてみた。

「知らない。」と言う。そこで、この上もなく大ざっぱな説明をした上で、「おもしろいからやってみないか。うまく誘えば五人は集まるだろう。」別にたいした期待があつて言ったわけではないが、好奇心のかたまりみたいなママは、いともあっさり乗ってきた。

昭和五十九年一月十五日、閉店までもういくばくもない「善兵衛」に五人の男女が顔をそろえた(紅一点はママ。この日は休み)。ママを除いてあとはみな初対面。早速酒が始まる。実は、連衆勧誘の「手」として、ハ「連句」は酒を飲みながらやるものであるVという意味あいのことを吹きこんでおいたのが、そのまんますんなりと実現されたわけである。

初めの少し緊張したような、ぎこちない気分がほぐれてきたところで、発句をだす。車座に多摩の地酒や明の春 水壺 (店に入つてすぐの、囲炉裡風の席を囲んでやった。「車座」の由来。)

「これに七・七の句を付けてください。発句の気分に合わせてらいいでしょう。」  
ママが脇を付けた。

まだらの雪に福寿草咲き 春  
O・K……これで「車座」がスタートしたのである。

この日は初折の裏が終ったところでお開きとなった(三月に満尾)が、終ってみると、皆さん難行苦行の果の、実に晴れやかな顔をしておられた。

さて、船出はしたものの、はたしてこれが続くものやら、ボシヤるものやら、おそらく後者だろうと思っていたのが、なんともう九年の歳月を閲している。連衆も増えた。酒につられてやってくるのが、そのまま居すわってしまう。連句の魔(魅)力と言ふべきか。多摩の一隅の「車座」、今後とも牛歩の精進を続けるのみ。

瀧川雅代

源心庵での第一回勉強会は今年一月三十日、折からの雪催いの中を集まった五人で行われました。A・C・C連句教室に入られてまだ日の浅い神谷安子様のご案内で、江戸川区立行船公園を訪れた一同は、手入の行き届いた美しい庭園と、色とりどりの鯉の遊ぶ汐入りの池を前にした風雅な庵に一目で魅了され、即座に月一回五ヶ月分の席の予約をし、その日は半歌仙一巻を巻きました。

のを待つ——尤もこれは私だけの経験かも知れませんが、これを克服するには、一巻でも多く回を重ねるしかありません。今の私達の「源心庵」は、いわば「猫養例会への階段の踊り場」、少しでも早く、怖がらずに猫養会の一団に連なれるようにと、足腰のトレーニングをしている、とても言えまじょうか。この「踊り場トレーニング」にご協力下さる先輩の方々大歓迎。また若しまだ猫養例会に足の疎む方が居られましたら一寸覗いてごらんになったらいかがでしょうか。ともかくも「源心庵の間」からの景色は、きつとお気に召す事と思います。「源心庵」についてのお問い合わせは左記へどうぞ。

(03) 396115554 篠原達子  
(03) 375112376 瀧川雅代  
半歌仙「雪催ふ」 篠原達子捌

この時の三人の新人の方を中心に、回を追って一人二人と輪が拡がり、楽しい雰囲気も醸され「源心庵のつどい」は六回を重ねました。一度ご参加下さった方は、この美しい庵のたまたまいをお気にいって下さり、二度三度とお顔を見せて下さいまして今では十人を超えるほどになりました。まだ会の名も無く、会員も増加中、ファジーといえはファジーな集まり乍ら、「新人を囲む和やかな勉強の場を」、が言わず語らずのモットー、おかげ様で、どうやら着実に成果が上って来ているように思われます。六月末現在のメンバーをご紹介しますと、神谷安子、須田智恵、長崎和代の三新人の方(いやもう新人とは呼べないかも)、それに私の同期又は前後の七、八名の方々、ベテランでは秋元正江様、最近では上月淳子様、雑賀遊様もご参加下さり一同の大きな励みになっております。

私達猫養会員にとって、年四回の猫養例会は何よりも楽しい年中行事、明雅先生御夫妻を中心に、新旧会員打ち混じっての一座には心躍るものがございます。しかし初学時代には、これが中々の難関で、足が竦み、頭の中は真っ白、ひたすら嵐の過ぎるのを待つ——尤もこれは私だけの経験かも知れませんが、これを克服するには、一巻でも多く回を重ねるしかありません。今の私達の「源心庵」は、いわば「猫養例会への階段の踊り場」、少しでも早く、怖がらずに猫養会の一団に連なれるようにと、足腰のトレーニングをしている、とても言えまじょうか。この「踊り場トレーニング」にご協力下さる先輩の方々大歓迎。また若しまだ猫養例会に足の疎む方が居られましたら一寸覗いてごらんになったらいかがでしょうか。ともかくも「源心庵の間」からの景色は、きつとお気に召す事と思います。「源心庵」についてのお問い合わせは左記へどうぞ。

法律の言葉と俳諧の言葉

佐藤 正明

法律の言葉は難解といわれるが、明治の言葉である囲繞地、瑕疵、焼燬等が日常的に使われてをり、最近の判決にも、「転貸の保証人に対する背信行為と認めるに足りない特段の事情を認めるに足りる証拠はない」等、晦渋極まりなき表現がみられ、その癖態役一〇年に処すと二億円支払えとか平然と言渡す、いわばかかる業界の大事な道具である。

一方、俳諧の言葉は、「滑稽のおかしみを宗とせざれば俳諧にあらず」(許六「歴代滑稽伝」)と言われ、「わがいはは驚もやどかるあたりにて」、「髪はやすまをしのぶ身のほど」のように、短い詩形の中に情感を込めようとする。

法律の言葉は正確な表現と論理が求められ、言葉の長短も難易も重要なことではなく、いとも簡単に悲しみも金錢に換え、何年間も個人の自由を剥奪してしまう。俳諧の言葉は、生活に影響力を持つか否かはとも角として、長句短句に凝縮され、もどきを介して人生宇宙をのみ込む広がりをもつてをり、その為の道具としての言葉である。そこで法律の言葉と俳諧の言葉の接点を探る手法として、俳諧的法律の言葉、法律的俳諧の言葉を探してみたが、予想通り皆無である。所詮、前者は秩序維持を目的とするものの道具であり、後者は花鳥風月、人情の中に芸術を創作する為のもので当然相容れざる運命にあるものと思われる。これらの言葉は、片や豪腕の男とすれば要領さえ判れば御し易くもなるが、手弱女の風情を持つ俳諧は、一見、優しく、しなやかな顔をしているが、これでなかなか、初心者には気疲れの多い美人である。

翻訳の言葉と俳諧の言葉

浅賀 淑代

猫養に入会させて頂いてから、これも仕事柄(翻訳業)かもしれませんが、俳諧！例えば芭蕉翁の

古池や蛙飛びこむ水の音  
を英訳しようなどという邪心が時々頭をかすめます。が、この作業は難しいものです。問題は、「古池や」の「や」の字です。「は」とも「に」とも印象の異なる「や」のニュアンスをふまえて適切に訳すにはどうしたらよいでしょう。敢えて試みますと There is... Hear... とはつきり二文に分かれることになり、説明的で、五・七・五の宇宙が何か異質なものになってしまいます。

さらに困るのは「蛙」の数です。一匹と断定して良いでしょうか。二匹(複数)ということはないでしょうか。ところが英訳する場合は、必ずどちらか一つの可能性に絞らなければなりません。どちらにでもとれる、あいまいな、広がりのある、うまい表現はとても英語では出来ないのです。これに関連して、興味深いことに、日本文学研究家のコロンビア大学・ドナルド・キーン教授は、

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮 (翁)  
の鳥の数は、一羽でも数羽でも、どちらも正しい。その論拠として、芭蕉の描いた一枚の絵には、八羽ほどの鳥が何本かの枯枝に止まっていると示唆され、翁自身二つの可能性を認めていたと言っておられます (NHK・人間大学)。  
当のキーン先生ご自身は、  
て、「一羽」に訳されているのを何かの本で拝見しましたが、皆様は何羽の鳥をお思い浮かべでしょうか。

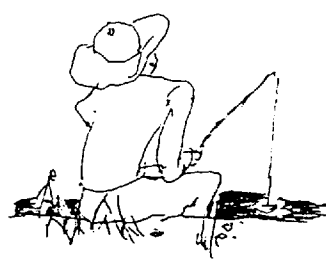


【Q】 俳席でお崩きに、付き過ぎて、離れ過ぎて、ということを言われることがありますが、この辺のことを分かりやすくお教えてください。（柏市 渡辺 秋景）

【A】 連句というのは、前句Aに付句Bを付けて、この付け合った二つの句の間に、新しいAでもない、Bでもない、Cという味を創り出すものです。だから前句Aに対して、付句Bが似かよったもの、近過ぎるものでありますと、AにBをつけても新しいCが生まれる可能性がほとんど無くなってしまいます。このような前句との関係にある付句を、べた付けとか、付き過ぎているとか言うのです。

A 恋の夜思ひがけなく雨降りて  
B ままよしつぼりこの屋根の下  
これでは、AとBとが全く同じで、付け合わせても新しいCを創り出すことはできません。  
それで、付句の心得として、「前句の続きを言うな」とか、「前句の根を切れ」とか言われ、前句から離れて付けることが要求されるのです。

A おもひ切たる死ぐるひ見よ  
B 青天に有明月の朝ほらけ  
A句からはすぐ戦場が連想されます。これがいわゆる根です。だから直接戦場を付けないで、当日空にあった有明月を出して、その下に展開される戦場と若武者の姿を想像させる。これがCになるわけです。  
このように、付句は前句の根を切って、離して付けると、前句と付句との間に読者の想像が入りこんで、新しいものを生み出すのですが、さればと言って、A・B二句の間を離しさえすればよいというわけではありません。



磁石のN極とS極とは、ある距離の限度でお互に作用するのですが、離れ過ぎると何の反応も起こしません。磁場の限界があるように、前句と付句にも離すには限界があって、離れ過ぎると何の反応も生みません。それではAとBから新しいCが生まれる可能性が全然なくなるわけです。

ただ、離れ過ぎか否かの判定は、個人によって異なり、非常に難しく、はっきり言ってその基準を示すことは困難です。ただ、連句は座の文学ですから、崩きの人の判定または一座の意見を参考にして、徐々にその程度を会得する外はありません。

元禄時代の「去来抄」には、「今の作者付くることを初心の業の様におぼえて、却て付かざる句多し。聞く人もまた聞こえずと人のいはむことをはちて、付かざる句とがめずして、能く付きたる句を笑ふやから多し・・・」と書かれています。付いていない句（離れ過ぎの句）をとがめないで、かえってよく付いている句を初心者の句だとして笑う人は現代にも大勢居ます。まだわされないように注意すべきところです。

杉内 徒司

そのむかし、芭蕉が愛した琵琶湖南域の風光を一望できる茶臼山公園の芭蕉会館の无名庵（むめいあん）を守る美濃豊月氏を訪ねたのは昭和四十六年十一月九日。ここを訪ねたのは、寺崎方堂宗匠が俳句献納に上京の折は東京駅から宮内庁への車を手配した」と三井武翁から聞いていたからである。

豊月氏は无名庵に常住されて、方堂の創刊された「正風」の発行を続けられている。寺崎方堂は神戸市の銘木商寺崎伊之介の長男として明治二十三年九月十五日出生。年少より作句を始め、二二歳（明治四十四年）大津の无名庵十五世瀬川露城門に入り、三十六歳（大正十四年）で立机印可証を受けた。

无名庵十八世として昭和十八年五月十二日入庵した後、約二十年間在住して多くの業績を残された。  
戦後二十二年三月、俳諧誌「正風」創刊。二十八年からは、宮中御歌会の御題の俳句を募り、入選句を宮中に参内して献納することを始めた。

その後、義仲寺の掃蕩する円満寺との仲違いを生じたので、三十三年地元の有志と共に義仲寺の東隣りに芭蕉会館新築の計画を発表した。この計画は変更されて場所も茶臼山公園に竣工されたのは三十九年十一月。方堂はその完成をみぬ前年の三十八年十二月二十四日義仲寺无名庵にて没した。享年七十三歳。

その間いろいろの事情があつて、当時落柿舎庵主の工藤芝蘭子が无名庵十九世となり、芝蘭子没後には斎藤兼輔氏が二十世となった。

さて、方堂宿願の芭蕉会館にも義仲寺境内の无名庵とは別に、方堂十八世の次の十九世には俳号如水と称した谷口久次郎元滋賀県知事が推されたが、无名庵とは云わず无名庵十九世と云う。谷口久次郎氏は農協人として全国的に知られている人である。

无名庵方堂が立机印可証を授与した六十九名のうち橋岡石（昭和十八年十月印可）、美濃豊月（昭和二十一年十二月印可）、山岡暁風（昭和二十八年三月印可）の三人が連句界に知られている。私は暁風には四十五年四月二十六日、松本市外浅間神宮寺の根津芦丈追善俳諧興行で、また岡石には五十年十一月二日、京都落柿舎で張行した第五回俳諧時雨忌にお目にかかり、方堂師の逸話などを聞くことができた。

方堂は俳諧活動が長かったので、没後暫くして門下生により「俳道善縁」が刊行されている。

編集部より

○ つゆいりになつても暫くは、「ことしは雨のふらぬ六月」の風情でした。雨が降らないと天気がいいと言ってしまうのは都会人の発想で、雨への思惑は人様々。俳席では連衆の色々な経験が投影されるのがおもしろく、又勉強になります。

○ 連句実作の上で困ったこと、分からないことございましたらご質問お寄せください。Q&Aで取り上げさせていただきます。

季刊「ねこみ」通信 第八号  
発行者 猫養連句会  
印刷所 アトリエ・NEKO